



プロGRESS・レポート 2015

Progress Report 2015

室戸世界ジオパーク

Muroto Global Geopark



室戸ジオパーク推進協議会

info@muroto-geo.jp

<http://www.muroto-geo.jp/>

目次

1. 概況（はじめに）	2
2. ネットワークへの貢献	3
2.1 国際会議等への参加と知識・経験の共有	3
2.2 他のジオパークとの交流	3
2.3 JGN への貢献とネットワーク活動	4
3. 運営計画と財政状況	4
3.1 運営計画と実践方法	4
3.2 室戸ジオパーク推進協議会の財政状況	4
3.3 財政運営方針	5
3.4 持続可能な経済発展を目指して	5
3.5 市の施策	6
4. ジオサイトの保全状況および保全活動の状況	6
4.1 佐喜浜躍動天然杉郷土の森	6
4.2 安芸森林管理署による遊歩道整備	7
4.3 室戸岬サイトの“落書き”事件	7
4.4 環境美化活動	7
4.5 試料採取手続き	8
4.6 新たな保全保護活動	8
5. 科学教育、防災教育、環境教育など地域の教育・普及活動の状況	8
5.1 室戸市教育委員会によるジオパーク学習の推進	9
5.2 室戸高校の取り組み	9
5.3 教員免許状更新講義での活用	10
5.4 アウトリーチ活動	10
5.5 調査研究サポート	12
6. ハード整備	13
6.1 室戸世界ジオパークセンター	13
6.2 その他ハード整備	13
7. ジオツーリズム	13
7.1 観光客の増加とガイド活動	13
7.2 ジオツーリズム推進チーム	14
7.3 高知県東部地域博覧会	15
7.4 室戸世界ジオパークセンターを拠点としたジオツーリズムの推進	15
8. 地域における活動と変化	15
8.1 JGN 全国大会	15
8.2 宿泊・飲食業者の活動	16
8.3 地域における日常生活とジオパーク	16

1. 概況（はじめに）

室戸世界ジオパークは、古第三紀から新第三紀にかけて形成された付加体、第四紀の氷河性海水準変動および継続的な地震性地殻変動によってつくられた海成段丘、そして巨大地震を伴って離水した海岸隆起地形など、プレートテクトニクスに起因する「大地の誕生」を目の当たりにできる場所である。日本は4つのプレートがひしめく活動的縁辺域（active margin）に位置し、世界でも有数の地震・火山大国である。その中でも本ジオパークは、プレートテクトニクス理論を初めて陸上で証明した四万十帯を間近に観察することができるほか、プレートの沈み込みに伴う100~150年周期の海溝型地震や、それに付随する1,000年あたり平均約2メートルという驚異的な速度の地殻隆起による著しい地形変化が人々の暮らしにも大きな影響を与えており、まさに変動帯を代表する地域といえる。

室戸世界ジオパークは、こういった地質・地形遺産を有するだけでなく、それらを巧みに利用した人々のいとなみがあることもまた、大きな特徴である。例えば、段丘面では水はけの良い地質と日照時間の長い平坦な地形を生かした農業が盛んである。室戸の大地を1~2メートル隆起させる海溝型地震の際には、水深が浅くなって使用不能になった漁港を掘り直して再起してきた歴史もある。室戸は、ジオハザードに対する「備え」と災害からの高い「復元力」、そして災害によってもたらされた資源の「活用」が機能している地域である。

近年、世界中の活動的縁辺域において巨大地震や津波、火山の噴火による大規模なジオハザードが相次ぐ中で、激しく変動を続ける大地と共に生きる本地域の人々の生きざまから、変動帯で生きる術を世界に向けて発信していくことが、私たち室戸世界ジオパークの使命であると考えている。

2008年6月に室戸ジオパーク推進協議会が設立され、2008年12月に日本ジオパーク認定を、2011年9月に世界ジオパークネットワーク（以下、GGN）加盟認定を受けた私たちのジオパークでは、高知県内で室戸と言えば「ジオパーク」と言われるほど、対外的にも認知度の高い地域として成長している。地域住民の主體的な動きも加速し、さまざまな分野で活動が広がっている。本報告書は、主にGGN加盟認定後の4年間について活動を報告するものである。



2. ネットワークへの貢献

室戸ジオパーク推進協議会は、発足以来ネットワーク活動に積極的に貢献してきたが、特に GGN に加盟してからは、他の加盟地域（other members of GGN）との交流・情報交換をしながら、どのようにネットワークに貢献できるかを模索し、実践を積み重ねてきた。

2.1 国際会議等への参加と知識・経験の共有

国際会議に参加した際には、単に室戸ジオパークの紹介をするのではなく、室戸ジオパークの経験や知識を他の地域のメンバーと共有することによってジオパーク全体の発展に貢献することを意識して発表をしてきた。例えば、2014 年のカナダでの第 6 回国際ジオパーク会議（6th International Geoparks Conference 2014）では、4 人の参加者が教育やジオツーリズム、無形文化遺産などそれぞれ別のテーマで、室戸でのジオパーク活動とそれらの活動から発見できたことなどを発表した。ランカウィジオパークで開催された 1st Regional Workshop on Sustainable Geopark Management 2015 には、多数のジオパーク準備地域（Aspiring Geoparks）が参加していたので、ロゴマークの効果的な使い方や地域住民の参加をどのように促進してきたかなど、これまでの室戸での経験について発表し共有した。

2.2 他のジオパークとの交流

国際会議や APGN シンポジウムに参加した際には、積極的に他のジオパークと情報交換交流の機会を設け交流を進めてきた。具体的には、ランカウィジオパーク、天柱山ジオパーク（Tianzhushan Geopark）、Jeju ジオパーク、香港ジオパーク、ウルグアイの Grutas del Palacio Geopark と交流してきた。特に、ランカウィジオパークとは、会長、事務局長、専門員が情報交換会に参加し、どのような交流を展開していくかを具体的に検討した。その後、大学間の学生交流プログラムに向けた調整検討を進めたり、互いに拠点施設等でリーフレットを配布し合ったり、HP に相互リンクを貼るなど相互に情報発信を行って協力し合っている。2014 年には、児童生徒を中心とした教育交流プログラムを計画し、クラフト



や手紙の交換を開始した。今後は、インターネットを活用した児童生徒の交流も始める予定である。また、近い将来、姉妹提携を締結すべく準備を進めている。相互情報発信については、天柱山ジオパーク（Tianzhushan Geopark）、Jeju ジオパークとも実施しており、インターネットを活用した児童・生徒の交流は、Grutas del Palacio Geopark とも話し合っている。

2.3 JGN への貢献とネットワーク活動

日本のジオパークは、日本ジオパークネットワーク（JGN）のメンバーでもあるが、室戸ジオパーク推進協議会は、JGN 活動に全面的に協力してきた。JGN 事務局員を 2 人が担当し、JGN 事務局長が国際会議に参加した際には補佐役として貢献してきた。また、事務局長会議への参加や地質・地理専門員による全国スケールでのジオパーク普及活動、国際交流専門員の JGN 国際対応への協力など、JGN 活動に尽力している。特に、第 3 回 JGN 全国大会（室戸大会）では、JGN の現状を強く意識したプログラムを用意し、JGN 活動の課題解決に向けて大きく寄与する大会を実現できたと考えている。JGN 全体のパンフレットについても、室戸のスタッフが中心となり、日本語と英語のパンフレットを作成した。また、ジオパークのユネスコ正式プログラム化に向けた動きについても、GGN メンバーとして日本の他のメンバーと協力し、ユネスコや GGN ビューローメンバーから送られてきた情報を翻訳して JGN で共有してきた。このように、JGN への貢献をとおして、GGN に貢献してきたところも大きいと考えている。

3. 運営計画と財政状況

3.1 運営計画と実践方法

安定した運営と地域の持続的発展を意識した計画策定は、ジオパーク活動を開始して以来の課題であった。協議会は、2012 年度から地域住民や協議会会員などと議論を重ね、2013 年度から 2015 年度までの 3 年間の実行計画を策定した。運営、ネットワーク、調査研究、教育・保護・防災、ジオツーリズムの 5 つをこの計画の重点項目とし、それぞれの項目ごとに、実践部隊として、「推進チーム」を立ち上げることを決定した。「推進チーム」は、積極的にやりたいと思っている人が参加しやすい場を設け、実践的に実行計画を実践していくことを想定した。その後、ジオツーリズム推進チームが 2013 年度に、その他の推進チームも 2014 年度に活動を開始している。

3.2 室戸ジオパーク推進協議会の財政状況

本協議会の財政運営は、2008 年に室戸ジオパーク推進協会を設立して以来、主として室戸市の補助金、高知県の補助金、および一般企業からの寄付金によって運営されている。特に GGN 加盟認定を受けた年度からは、市の補助金・委託料金の増額により、専門員の人員増とジオパークの普及啓発活動の充実が図られ、現在に至っている。【別表 1】

【別表 1】室戸ジオパーク推進協議会に対する室戸市からの補助金並びに委託料(単位:円)

年度	2010	2011	2012	2013	2014
委託料	10,948,000	22,910,000	20,802,911	16,244,773	20,123,000

市補助金額	6,189,000	7,999,020	5,970,071	6,043,037	5,269,987
-------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------

そして、市の事業としても協議会の実施計画に歩調を合わせ、認定以降ジオパーク活動を推進するための公共事業を実施し、協議会を手厚くサポートしている。

また、GGN 加盟認定後には、企業から協議会への寄付金も著しく増加し、これらの寄付金はジオツーリズムの推進などに役立てられ地域経済の活性化に寄与できている。【別表 2】

【別表 2】室戸ジオパーク推進協議会に対する寄附金（単位:円）

年度	2011	2012	2013	2014
団体数	1	1	2	3
寄附金額	300,000	532,466	1,203,380	1,820,604

3.3 財政運営方針

室戸ジオパークの財政運営方針は、これまでどおり市の補助金を主な財源としながら、国・県の補助金事業を優先的に活用し、効果的な財政運営を図っていく。また企業からの寄付金は、室戸ジオパークの保護活動や青少年に対するジオパーク教育活動、ジオツーリズムの推進やオリジナルグッズの販売などに積極的に投入し、地球遺産の保全と経済活動の活性化を図るとともに自主財源の確保にも努める。

3.4 持続可能な経済発展を目指して

ジオパークによる持続可能な発展のために、室戸ジオパークは地域の企業や団体と連携して地域の持続的な経済活動の振興に取り組んでいる。

特に GGN 加盟認定後には、各種メディアにおいて室戸ジオパークが注目される機会が多くなったことは、市内の団体や企業の経済活動に好影響を与えている。

まず、代表的なジオサイトである室戸岬においては、ジオガイドの件数が飛躍的に増加しているとともに、市内の各主要観光施設においても観光客は増加傾向を示している。【別表 3】

【別表 3】室戸岬におけるジオガイド案内人数（単位:人）

年度	2010	2011	2012	2013	2014
案内人数	947	5,083	8,013	6,886	7,301

また、室戸ジオパークのロゴマークを活用した商品も民間企業によって開発・販売され、経済活動の拡大につながっている。

一方、協議会においても認定後にオリジナルポロシャツやパーカーを商品として発売し、自主財源を確保する活動するとともに、そこから得た利益は、再びジオパーク活動に充てることで、普及啓発と地域経済の活性化に貢献している。室戸ジオパークのロゴ使用は、申請許可数がこれまでに 124 件となっており、交通安全の広報啓発活動のチラシ・ポスタ

一などにも使用されている。例えば、2013年度に室戸ジオパークロゴを使用した商品販売数の合計は67,898個っており、総売上金額は1960万3840円となっている。

3.5 市の施策

室戸市は、2011年3月に策定した『室戸市総合振興計画』（10カ年計画）に、室戸ジオパークの推進を位置づけ、地域資源の保護と活用を推進し、観光振興と交流人口の拡大による地域振興を図っている。

室戸世界ジオパークの推進のための事業として、拠点施設やサイトの整備、看板類の設置などハード整備を、室戸ジオパーク推進協議会の活動推進計画と協調して実施している。

GGN加盟認定以降は、市の観光部門との連携がさらに強化され、地球遺産の保全や環境保全活動、ジオパークを活かした観光振興などでの協力体制がとられている。

また、防災部門とは、地震・津波に対する情報共有をすすめ、災害時における市民や観光客の避難支援対策に関して連携を進めている。

4. ジオサイトの保全状況および保全活動の状況

ジオサイトの保全状況はおおむね良好である。地質遺産は、自然公園法、文化財保護法、室戸市文化財保護条例、室戸市環境基本条例によって保全されている。特に、海岸付近一帯は、自然公園法に基づく室戸阿南海岸国定公園（1964年に指定）となっており、開発行為が厳しく規制されている。また、室戸市環境基本計画で、行政と民間が一体となって、環境保全に取り組むための方針や行動計画が定められている。

4.1 佐喜浜躍動天然杉郷土の森

段ノ谷山サイトにある天然杉の巨木群落（国有林内）は、GGN加盟認定前までは地元の人でも一部のしか知らないほどの知名度であったが、GGN加盟前後にマスコミが地質以外の見所として大々的に取り上げたことから見学客が急増した。この巨木群を地元の学校教育等に活用してきた地元団体らが中心となって、林野庁の「郷土の森」として活用を始めた。林野庁の「郷土の森」事業は、地域における象徴としての意義を有する等により、森林の現状の維持について地元市町村の強い要請がある森林を保護し、あわせて地域の振興に資することを目的とするものである。地元の要望をふまえて室戸市を通して申請が行われ、段ノ谷山の天然杉巨木群は2012年10月30日に「佐喜浜躍動天然杉郷土の森」として保護林とされた。保護林とする期間は30年間である。これに合わせて地元住民が中心となって保全やガイド活動を行う「佐喜浜躍動天然杉郷土の森を守る会（段杉会）」という団体も結成された。ガイド養成講座も実施されており、天然杉巨木群が生育する大地の成り立ちを交えたジオストーリーを伝えられるガイド養成に取り組んでいる。なお、段ノ谷山

サイトの訪問客が急増していることから室戸市はトイレの新規整備を行った。

4.2 安芸森林管理署による遊歩道整備

大規模崩壊地とその治山工事史を体感できる「加奈木のつえサイト」では、認定後、安芸森林管理署によって新たに遊歩道が整備された。地質遺産および貴重な土木遺産として、世界ジオパークとしての22か所のサイトの一つに指定されていることから遊歩道の整備が行われた。

4.3 室戸岬サイトの“落書き”事件

2012年4月12日に、室戸岬の遊歩道沿いの岩石にスプレー塗料による落書きがあると報告があった。落書きされた岩は斑れい岩の転石で、室戸阿南海岸国定公園の第一種特別地域内であり、国の名勝に指定されている地域内でもあった。協議会としては警察に通報するとともに、協議会会長のコメントを発表した。なお、落書きは文化財保護の観点から、高知県文化財課の協力を得て、高圧洗浄機によって塗料を削り落として原状回復を行った。

室戸岬は、世界認定された室戸ジオパークの中でも重要な見所の一つであり、これまで市民や多くの観光客に親しまれてきた場所です。地元だけでなく県内外の子ども達の野外学習の場所としても活用されてきました。そのような貴重な資源を心ない人の行為によって、傷つけられたことは、非常に遺憾に思っています。

今後は、自然保護や活用に関係機関や関係団体とともに取り組んでまいります。

室戸ジオパーク推進協議会 会長 小松 幹侍（室戸市長）



4.4 環境美化活動

定期パトロールと海岸清掃によって台風などの漂流物と不法投棄の除去活動を継続的に

行っている。認定後は、ジオサイトの環境美化活動が盛んになっている。協議会のみならず、市民、室戸市ガイドの会、高知県立室戸高校生徒会、民間団体などによって活動が行われている。室戸高校生徒会の生徒会長選挙では、立候補者が公約として「室戸ジオパークの清掃活動」を掲げるなど、ジオパークの環境美化意識が少しずつ育ってきている。



市民と行政による共同環境美化活動
(行当・黒耳海岸サイト)



地域住民による全国大会に向けた
全市一斉国道除草作業

4.5 試料採取手続き

GGN 加盟認定の際の申請書で、研究者による試料採取許可申請を行わない研究者が見受けられることから、その対策として協議会が法令遵守を広く学会通じて研究者に呼びかけることを明示した。その後、地質専門員が試料採取の相談窓口となり、地質資源の保全や景観に配慮した試料採取場所のアドバイスや現地調査への立会い、行政への許可申請の便宜を図ってきた。これは、専門知識を有する職員が少ない行政、申請作業が円滑な研究活動に支障となっていた研究者、双方にとってメリットのあるものである。当初、年間1～2件程度であった試料採取の相談は年々増え、2014年には6件の申請があった。これは、保護・保全への理解度やジオパークに認定されたことによる注目度の向上を反映していると考えられる。ジオパーク内における研究調査の状況把握と地質遺産の保全を協議会で管理する体制が整いつつある。

4.6 新たな保全保護活動

室戸市観光ガイドの会と植物保護活動グループ、地域の美化活動をしているグループとが協力し合って、絶滅危惧種であるミズキンバイの自生地（菜生・坂本サイト内）において、周りに生えてくる他種の植物を除去し、ミズキンバイを保護する活動を行っている。

5. 科学教育、防災教育、環境教育など地域の教育・普及活動の状況

地域の教育・普及活動は、認定前よりも活発に継続的に行われており、広がりも見せている。協議会としては教育や防災イベントの実施、室戸市内の学校教育での活用、県内外の大学の実習授業受け入れ、インターンシップの受け入れ、県内各種団体の研修受け入れ、

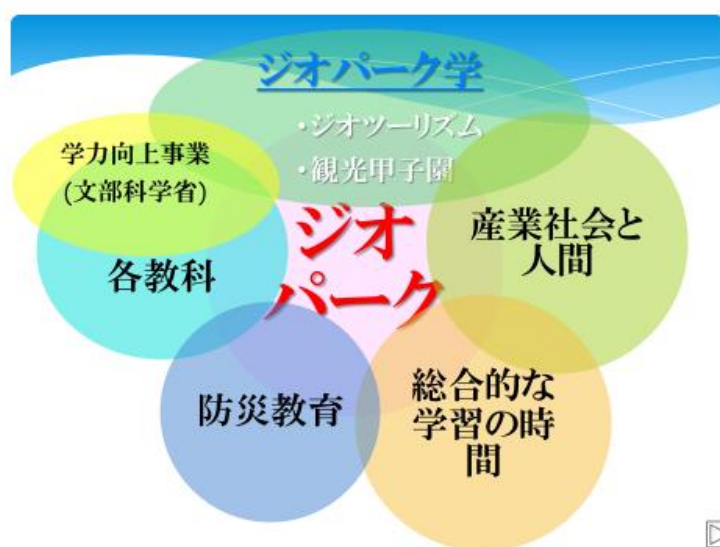
学生や研究者による調査研究サポートなど、さまざまな切り口で教育活動を実施している。
また、協議会以外の動きも活発になってきている。

5.1 室戸市教育委員会によるジオパーク学習の推進

教育行政においてより充実したジオパーク学習推進が図られている。2011年には、室戸市教育委員会・室戸ジオパーク推進協議会による社会科副読本「室戸ジオパークジオガイドブック」が発行され、2014年には、高知県教育振興基本計画を効果的に推進するための教育版「地域アクションプラン」（高知県・市町村協働事業）において、小中学校を対象としたジオパーク野外学習のためのバス代等が予算計上された（事業名「目指せ！室戸ジオパークガイド」）。

5.2 室戸高校の取り組み

室戸世界ジオパークにある唯一の高等学校、室戸高校では、ジオパーク学をはじめ、産業社会と人間、課題研究、各教科等様々な科目でジオパークに関する学習活動に取り組んでいる。



「ジオパーク学」では、2014年に観光甲子園（高校生観光プランコンテスト）に取り組み、応募総数69校131プランの中から本選出場の10校（10プラン）に選出された。兵庫県神戸市で行われた本戦に参加したジオパーク学2年次受講生にとって、不特定多数の前で発表を行うという大きな経験の場になった。また、本戦には、多数の市民も応援にかけつける



など、「ジオパーク学」をとおして、高校生と市民がつながる機会にもなっている。

1年次に履修する「産業社会と人間」では、郷土理解を目的に「地域を知る」という項目を設け、漁業や農業、観光等の地域産業の観点からジオパークについて学習している。他の各教科でもジオパークに関連する学習を組み込み、学力向上事業では GGN 加盟認定に向けて努力した人たちや、地域振興のためにボランティア活動に取り組んでいる人たちのことを学んだり、体験談を聞いたりして自分たちも頑張ればできるという意識を育て、地域発展や地域貢献に寄与する人材の育成に取り組んでいる。

2013 年には、「ジオ学で防災教育を」実践が文部科学省の防災教育チャレンジプランに採択された。この実践は、室戸ジオパークという地震発生メカニズムを実感できる土地で生徒の成長を計ったものである。学校や地域が用意したものではなく、生徒が主体的に活動するということを第一の目的とした。自らが動いて活動し、地域住民とのコミュニケーションの中で、既存のハザードマップをより有効に利用できるように、住民一人一人に合わせた避難経路や減災のための計画作りを行い「避難カルテ」作成を行った。

5.3 教員免許状更新講義での活用

学校教育において、郷土の地質・地形や自然環境、人々の営みを取り扱うことは、次世代の人材育成という意味で、持続的な地域発展という観点からも重要である。しかしながら、その重要性を認識している教職員がまだそれほど多くないのが現状である。すなわち、教員に対する教育が課題である。2015 年 2 月には、新たな取り組みとして、教員免許更新講習に推進協議会の地質専門員を講師として派遣し、「独立行政法人国立青少年教育振興機構国立室戸青少年自然の家」の主催のもと、小中学校の教員 40 名を対象にジオパークを活かした自然体験活動の指導法に関する講座が実施された。

5.4 アウトリーチ活動

○サマースクール

日本ジオパーク認定以降に 3 回開催したサマースクールでは、学会や第一線の研究者を講師に迎え、大地の成り立ちや防災を総合的に理解するプログラムを小学 5 年生～高校 3 年生を対象として実施してきた。毎年、高知県内と四国内から 20 名程度の参加があり、協議会が中心となりつつも、地域住民や室戸青少年自然の家および室戸市内教職員の積極的な関与が特徴である。また本事業は、研究者と地域を結びつけるプラットフォームとして、教育プログラムの開発の場、ジオパークガイドの成長の場としても機能している。サマースクールで実施された教育プログラムは、室戸市内の中学校や室戸青少年自然の家での事業において、継続的な利用が図られている。

○まがりラボ

地球科学を、工作や実験を通して楽しく学べるイベントとして推進協議会地質専門員を中心にイベントを実施した。サマースクールと異なり、申込み不要・出入り自由の形式で実施し、できるだけ多くの住民が地域の自然を題材にした自然科学に触れる機会を設けることを目的とした。休日の午後 3 時間の開催時間で、約 80 名、幼児からお年寄りまで幅広い年齢層の参加がみられた。特筆すべきは室戸市民の参加が全体の 7 割以上を占めていたことである。地域のことを広く正しく理解し、次世代を担う人材を育成していくことが本プログラムの目指すところである。ジオパーク活動の基盤である自然科学分野の入口として「まがりラボ」を位置づけ、より専門性の高いサマースクールと並行して実施していく。



○学会による現場観察会ならびに地域住民向け講習会

日本地すべり学会による現地観察会を誘致し、同時に地域住民や中学生を対象にした特別講演会を開催した。研究者の世界を室戸市佐喜浜地区の地域住民や中学生に伝えることで、なぜ山が崩れるのか、山崩れとどう共存すべきなのか、問題提起をおこなった。



佐喜浜地区住民を対象にした地すべり学会の講演会

○救荒植物に関する講習会

2013 年に高知工科大学と協議会の連携事業として、渡邊高志教授（植物学）らによる「救荒植物」（災害時食糧備蓄となる植物）の現地観察会ならびに試食会を行った。災害時の食料不足を補う上で救荒植物の知識を得ることは減災にもつながる。また、地元婦人会のみなさんによって救荒植物をつかったお弁当が作られた。この救荒植物の試食会は、2014 年に開催したジオパーク講習会でも試食として参加者に振る舞われた。

○JAMSTEC との連携事業

室戸ジオパークは、国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）との間で、室戸ジオパークの持続的な発展を推進するため、連携協定を締結し、共同研究や普及啓発に関する事業を実施している。

2012年7月には、室戸市にて海洋調査船「なつしま」の公開イベントを開催し、会場には、約1200人の参加者があった。

2014年7月には、「室戸ジオパーク講演会」を開催し、最先端技術で探る室戸の未来をテーマに、100年～150年周期で起こる南海地震に関する研究と、地震・津波に対する防災意識の向上などについて講演を行い、これからの室戸の未来を考えた。

2015年4月には、室戸世界ジオパークセンター敷地内に JAMSTEC の設置する地震津波観測監視システムの陸上局が開設され、リアルタイムの観測データをセンター内で見ることができるようになった。

5.5 調査研究サポート

○地質学分野

室戸ジオパークは最新の調査研究との関わりを保っている。日本ジオパーク認定以降、室戸岬の斑れい岩の岩石学的研究をはじめ、室戸半島全域を対象とした構造地質学的研究、古生物学的研究が、名古屋大学、金沢大学、高知大学、国土館大学の研究者およびその学生によって進行中である。高知大学と国土館大学では、ジオサイトとしての整備計画や地域の研究ニーズを踏まえつつ、進められていることが特徴的である。また、紀伊水道における地震・津波観測監視システム（DONET）からの情報を整備中の拠点施設で公開し、防災教育に活かされようとしている。

※ 現在進行中の研究テーマ

名古屋大学：室戸岬の貫入岩体による熱の影響

金沢大学：丸山海岸のシロウリガイ化石

高知大学：室戸半島に分布する海底地滑り痕跡の記載およびメカニズム

室戸半島西海岸に分布する生痕化石

国土館大学：室戸半島に分布する炭酸塩ノジュール（鉄丸石）の生成メカニズム

○人文社会科学分野

人文地理学や観光学の分野での大学生の卒業論文等の受け入れを積極的に行っている。研究成果は冊子として整理しておりアーカイブ化を目指している。また、大学の野外実習授業を積極的に受け入れている。大阪市立大学文学部の「地理学野外調査実習Ⅰ」や広島大学総合科学部の「地域調査演習Ⅰ」などを受け入れた。調査結果は、室戸市民図書館に蔵書として収蔵するなど、郷土資料の拡充につながっている。

6. ハード整備

6.1 室戸世界ジオパークセンター

室戸世界ジオパークセンターは、室戸ジオパークの GGN 加盟認定を機に、2011年3月に廃校になった中学校を、ジオパークの拠点施設として改修を行なったものである。

整備に向けては、2011年11月に行政関係者や民間団体、住民の代表などによって室戸ジオパーク拠点施設検討委員会を設置、拠点施設の設置目的や内部機能などについて議論された。2013年3月に基本計画が策定されるまでに委員会を12回開催したほか、市民を対象としたワークショップも6回行うなど検討を重ね、「各ジオサイトへ行ってみたくなる情報発信」、「観光客と地域の人との交流の場」、「地元の人もジオを学べる場」など、多くの意見を集約して基本計画が策定された。

整備工事は、2013年12月に着手、2015年3月末に完成となった。

開館時間は年中無休、入場無料で利用することができ、地球遺産の保全や教育への活用、ジオツーリズムによる観光振興とともに、防災教育の場としても期待されている。

6.2 その他ハード整備

室戸世界ジオパークは、各サイトの整備を行い情報提供と安全性の向上を図っている。

- ・日沖海岸歩道整備（2011）
- ・羽根岬公園駐車場階段整備（2012）
- ・佐喜浜加奈木の崩、段の谷山歩道整備（2012）
- ・佐喜浜段の谷山公衆トイレ整備（2013）

7. ジオツーリズム

7.1 観光客の増加とガイド活動

GGN 加盟認定を契機に室戸市への観光入込客数は増加している。個人旅行者のみならず募集型団体旅行においても室戸ジオパークのガイドを利用するケースが見受けられるようになってきた。常時3つのサイトのガイドツアーが実施可能で（available）、ホームページからの予約も可能になるなど、徐々に受け入れ態勢が強化されつつある。

別表5 室戸市観光入込客数の推移（GGN 加盟認定前後の10年間）（単位：人）

年	総数	県内	県外
2005	177,086	100,384	76,702
2006	198,802	116,905	81,897
2007	263,730	145,512	118,218
2008	360,919	201,576	159,343

2009	440,885	230,793	210,092
2010	461,964	198,742	263,222
2011	487,261	217,542	269,719
2012	531,876	237,791	294,085
2013	519,643	255,820	263,823
2014	632,881	298,655	334,226

出典：室戸市商工観光深層水課資料

3つのガイドツアーの中でも一番数が多く、毎日のように実施されているのが、室戸市観光ガイドの会による室戸岬サイトのガイドツアーである。年中無休でジオパークガイドを行っており、事前予約制ながら当日の飛込み依頼にも柔軟に対応している。2015年5月までにすでに合計3万人以上をガイドしてきた。

ガイド数の不足が課題であったが、ガイド養成講座を継続的に実施することで、ガイドの数が46名まで増加した。ガイド利用者は県外からの利用者が増加している。

室戸市観光ガイドの会では、毎週土曜日に勉強会を開催し、学び合い、情報を交換する機会とするなど、ガイドのクオリティ向上を目指し、活発に活動している。

7.2 ジオツーリズム推進チーム

2013年、室戸ジオパーク推進協議会では、実行計画を実際に行動に移していく実戦部隊として、5つの「推進チーム」を立ち上げることを決定した。そのうちの一つが「ジオツーリズム推進チーム」である。「ジオツーリズム推進チーム」は、広く市民や室戸ジオパーク推進協議会会員にアナウンスし、実際にやりたいと思っている人であれば、誰でもいつからでも参加できることを周知した。その結果、2013年7月から、ほぼ毎月1回のペースで会議を開き、新たなツアーを開発するための下見会を実施したり、ツアーを創って実際に有料で実施し、その後反省点やお客さんからのフィードバックを反映させて更に改良したツアーを実施してきた。これらのツアーは、季節限定で実施してきたが、今後は通年で実施していくことも視野に入れている。「ジオツーリズム推進チーム」の活動をとおして、チームのメンバー間で「室戸世界ジオパークで実現したいジオツーリズムとは何か」をテーマに活発な議論ができ、また下見会などでは地元の魅力に気づき、発見し、これまでになかった最近の動きを知るなど、非常に有意義な成果があがっている。



7.3 高知県東部地域博覧会

2015 年 4 月から 12 月まで室戸ジオパークを含む近隣の 9 市町村で地域博覧会を開催している。博覧会開催に向け、2013 年から準備を進めてきたが、室戸ジオパーク推進協議会も、企画の段階から関わり尽力してきた。コンセプトは「高知県東部の人のおもてなしとジオの恵みにであう旅」となっており、ジオパーク活動が周辺地域にも波及していることがわかる。この博覧会では、新たな体験プログラムの構築を目指しており、ジオパークからも多くの案を出し、3 つのプログラムが採用された。自然体験、サイクリング、生き物観察の 3 つである。提案内容は、これまでにジオツーリズム推進チームや、ジオガイド、ジオマスターなどと話し合ってきたことをもとに作成し、それまでの話し合いを活かすことができた。これらのプログラムは、いずれもジオパークをじっくりと楽しんでもらうために開発したものであり、地域博覧会終了後も継続していく予定である。

7.4 室戸世界ジオパークセンターを拠点としたジオツーリズムの推進

2015 年 4 月にオープンした室戸世界ジオパークセンターは、室戸世界ジオパークのメインテーマ「海と陸が出会い、新しい大地が誕生する最前線」を体感するためのフィールドへの誘いを目的としている。現場で見られないもの、例えば海底地形や過去、地質学的なタイムスケールでの地球活動の様子などを伝えることで、フィールドでの感動をより豊かなものにしようというものである。センターの受付カウンターではジオツアーや体験プログラムの受付も行い、ジオツーリズムの拠点として機能しはじめている。レンタサイクルサービスも開始し、周辺の工場と連携して工場見学を実現するなど、新たなジオツーリズムのプログラム、ツール開発も始まっている。

8. 地域における活動と変化

8.1 JGN 全国大会

2012 年 11 月 2 日～5 日まで、第 3 回 JGN 全国大会を室戸ジオパークで開催し、日本中のジオパーク関係者やこれから関わりたい人たち約 500 人が室戸に集って熱く語らった。

この全国大会の開催にあたっては、地域住民のさまざまな参加があった。大会実行委員会の発足には、室戸市内の市民団体や、民間企業を中心に約 50 名近いメンバーが集まり、交通・宿泊対策やおもてなしについて意見を出し合い、大会の運営方針を決定した。大会一週間前には、1000 人近い地域住民が、約 50 km にわたるジオパーク内の国道清掃を実施した。

大会中のジオツアーでは、小学生や住民のガイドが活躍し、中高生・一般市民で構成した吹奏楽団が、室戸ジオパークをテーマしたオリジナル曲の発表を行った。直接大会に関わったボランティアは 450 名を数えた。

こうした市民の大会参加を通して、それまでジオパークと関わりがなかった人との間で新たなつながりが生まれ、その後のジオパーク活動の活性化につながっている。

また、この大会には、韓国の Jeju やマレーシアのランカウィジオパークからの出席もあり、ジオパーク間の友好交流を図ることができた。

この4日間を通じて、私たちは「人と地球の心地よい関係のために」をテーマに、ジオパークにおける持続的な発展について分科会やシンポジウムなどで議論を交わすことによって、お互いの関係を深めることができた。

8.2 宿泊・飲食業者の活動

経営者らは、「ジオパークが始まって、視察やマスコミ取材などのお客が増えた（宿泊業）」「バスの利用が増加した（観光バス会社）」「ジオパーク関連メニューを取り入れたことで、それを目的に訪れてくれるお客さんが出てきた（飲食店）」など、何らかの効果を感じている。GGN 加盟認定後は、それまで少なかった外国人客が徐々に増えてきたため、他の同業者や協議会国際交流専門員、地域の英語サークルなどと協力して、地震発生時のインストラクションやメニューの英語表記など、少しずつ外国人を受け入れ体制を整備してきている。

8.3 地域における日常生活とジオパーク

2010 年から協議会が販売している室戸ジオパークポロシャツは、2014 年 3 月末までに総売り上げ枚数約 5,000 枚に達している。現在では、室戸市内の銀行、郵便局、スーパーの夏の制服に採用されるなど、日常的に着用する人が見受けられるようになっている。また地域住民からは、新色を求める声も多く、毎年のように新色のポロシャツを追加している。

地域住民の主体的な動きも広がっている。農業を営む者が商品の箱に「世界ジオパーク西山台地産」といった文言を入れているケースも見受けられる。運送会社は県外への長距離トラックの車体に室戸ジオパーク宣伝 PR イラストを導入した。



2015 年 5 月 9 日には、東部地域博覧会の補助金を活用しながら、室戸市商工会青年部が中心となって行政や他の民間団体と協力して、室戸ジオパークを舞台にトライアスロン大会を開催した。

このように、ジオパーク活動が展開されているなかで、消防車や路線バスのバス停、ランドセルカバー、市内専用ごみ袋に室戸ジオパークのロゴが入っているなど、室戸で暮らす住民の日常生活のいたるところにジオパークロゴがあふれている。GGN 加盟認定後、室戸では地域住民の日常生活とジオパークがますます密接につながり、ジオパークは「誰かほかの人の特別なもの」ではなく、「ジオパークで暮らしている」という感覚や、「わたしたちのジオパーク」という意識が広がってきている。

